

Japan Society of Island Studies

日本島嶼学会



Vol.82

NEWS LETTER

2026.7.31

Contents

2026 年度通常総会関係のご案内	1
2026 年次今治大会 全体スケジュール	2
2026 年次今治大会 一般研究発表スケジュール	3
「第9回 島の医療を考える研究会」のご案内	7
日本島嶼学会 2026 年度第1回理事会 議事録	9
■ 新刊紹介：『男たちの船出-千石船佐渡海峡突破（伊東潤 著）』	11
■ 新刊紹介：『人間が「人間」となるためのコミュニティ 環境・共生・協働 （富坂キリスト教センター編）』	13
■ 新刊紹介：『都の風—阿新丸物語（野崎喜一 著）』	15
会員の動向（2026 年 3 月～7 月）	17

2026 年度通常総会関係のご案内

ニュースレターの学会ホームページ掲載に伴い、会員の皆様にはメールリスト等でご案内します。

2026 年次今治大会 全体スケジュール

9月4日(金) 【第1日】

時間	行事	場所・内容
17:00～	理事会	小会議室
18:30～	会場設営	各会場

9月5日(土) 【第2日】

時間	行事	場所・内容
10:00～10:15	開会式	第1会場（4階 第2研修センター） 日本島嶼学会会長挨拶：小西潤子（沖縄県立芸術大学） 実行委員長挨拶：村上和弘（愛媛大学）
10:15～12:30	基調講演・シンポジウム	第1会場（4階 第2研修センター）
12:30～13:30	昼休憩	各自
13:30～16:45	一般報告	第1会場（第2研修センター）、第2会場（大会議室）、第3会場（中会議室）
17:00～18:00	総会	第1会場（第2研修センター）
18:30～20:30	懇親会 （参加費：5,000円）	会場：炉ばた焼き 酒仙 (https://robatayakisysusen.owst.jp/) ※飛び入り参加を希望される方は実行委員までご相談ください。

9月6日(日) 【第3日】

時間	行事	場所・内容
10:00～12:05	一般報告	第1会場（第2研修センター）、第2会場（大会議室）
12:00～13:00	昼休憩	各自
13:00～16:30	島の医療を考える研究会 一般報告	第1会場（第2研修センター）：第9回 島の医療を考える研究会 第2会場（大会議室）：一般報告

2026 年次今治大会 一般研究発表スケジュール

【一般報告の注意事項】

- ・発表時間は 25 分（発表 15 分・質疑 5 分・交代 5 分）です。時間を厳守してください。
- ・会場にはパソコン（Windows）を設置しておりますが、**ご自身の PC を HDMI ケーブルでつないで報告いただいても構いません。会場パソコンを使用される際は USB メモリ等にデータを入れてお持ちください。**
- ・発表者の交代は速やかに行い、**発表者は次の講演の座長を行ってください。休憩・移動時間により区切られるブロックごとに、最初の発表者の座長は当該ブロック最後の発表者が担当します。**

9 月 5 日(土) 午後

時間	第 1 会場（第 2 研修センター）	第 2 会場（大会議室）	第 3 会場（中会議室）
13:30～ 13:55	梅村哲夫 （名古屋大学） 沖縄県の国内航空旅客流動のグラフィティモデル分析－空港インフラ整備と LCC 参入が旅客需要にもたらした変化－ 【座長】山田	鈴木 雅彦 （東京国際大学・（一社）南の島しょ域交流機構） 離島を結ぶ港と鉄道の関係性に関する一考察 【座長】吉岡	淵上ゆかり （同志社大学） 世界自然遺産「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」に対する所有意識と保全意識の地域間比較 【座長】黒沼
13:55～ 14:20	吉川直人 （志学館大学） 学生の離島フィールドワーク教育の実践と意義－地域の日常に息づく福祉を通して－ 【座長】梅村	木塚雅貴 （京都府立医科大学） Rathlin 島の学校教育と医療の維持を志向する政策の考察 【座長】鈴木	松村悠子 （大阪大学） 離島における電気自動車普及の構造的課題と政策的対応－文献調査と充電インフラデータ分析から－ 【座長】淵上
14:20～ 14:45	山田由美子 （個人） 記憶のキャラバン 記憶のキャラバン・脱植民地化のニューカレドニアで和解への試み 【座長】吉川	吉岡慎一 （一般社団法人地域循環共生社会連携協会） カーボンニュートラルに向けた島嶼地域における施策展開と課題 【座長】木塚	黒沼善博 （宝塚医療大学） 観光需要が及ぼす島嶼水資源の構造変化－宮古島地下ダム将来運用の検討－ 【座長】松村
14:45～ 14:55	休憩・移動	休憩・移動	休憩・移動

14:55～ 15:20	江寄那留穂 （愛知淑徳大学） 坂本萌歌 ◎（関西学院大学） 離島における人口移動パターンの 歴史的変遷 ― 沖縄県伊江島の世 代間比較 ― 【座長】 竹林	鳥居享司 （鹿児島大学） ソデイカ漁業をめぐる管理 規制と漁業経営への影響分 析 【座長】 碓井	俵寛司 （岡山理科大学） 陶磁器から見た日本統治時 代の台湾 【座長】 鍋内
15:20～ 15:45	竹林紀雄 （文教大学） 島嶼文化の記憶を継承する音楽と 映像―照屋林賢における琉球語・ 琉球音階の表現実践― 【座長】 坂本	碓井健寛 （創価大学） 離島統計年報パネルデー タからみる主要離島の人口変 化―2003～2024 年「人 口・世帯数・人口動態」系 列の接続― 【座長】 鳥居	鍋内千里 （立命館大学） 福江島における島立ちの影 響 【座長】 俵
15:45～ 15:55	(以降、総会準備)	休憩・移動	休憩・移動
15:55～ 16:20	総会準備	宮坂 大智 （村おこし NPO 法人 ECOFF） なぜ若者は「お金を払っ て」離島・農山漁村で 10 日 間暮らしたのか ―15 年 間・約 4000 人の住み込み 型ボランティア参加者デー タからみる参加特性とその 変化― 【座長】 長谷川	岩本隆生 （SBI 大学院大 学） 小規模離島における地産地 消型野菜販売と地域内経済 循環 ―東京都青ヶ島村の郵 便局無人販売を事例として ― 【座長】 湯川
16:20～ 16:45		長谷川秀樹 ◎（横浜国立大 学） 蔡成彬 （横浜国立大学） 宗教空間の観光化における 「まなざし」の交錯と消費 構造 【座長】 宮坂	湯川 竜成 （東京農業大学） 離島における新規農産物導 入の可能性と課題 ―― 八 丈島産モリンガの消費者受 容を手がかりに ―― 【座長】 岩本

9月6日(日) 午前

時間	第1会場（第2研修センター）	第2会場（大会議室）
10:00～ 10:25	尾上智子（愛媛県立医療技術大学） 瀬戸内海の在郷に暮らすフィリピン人結婚移民の風邪への対処法をめぐる人類学的考察 【座長】 小林	岩谷暢子（神戸学院大学・海上保安大学校） 島嶼国が提起する国際法秩序への問い（最終） 【座長】 町
10:25～ 10:50	谷口光代◎（宮崎大学） 金子政時（宮崎大学） 山本宗立（鹿児島大学） 河合溪（鹿児島大学） 川西基博（鹿児島大学） 大塚靖（鹿児島大学） 奄美大島におけるデング熱に関する知識と蚊対策行動およびリスク認知との関連 【座長】 尾上	溝田浩二（宮城教育大学） 宮城県金華山で半世紀ぶりに実施された総合的昆虫調査 【座長】 岩谷
10:50～ 11:15	大木浩（鹿児島県立大島病院） 離島における血液供給体制向上への関係団体の取り組み 【座長】 谷口	高木泰伸（大阪大学） 瀬戸内海島嶼の暮らしと戦後の地域づくり運動 一尾道市百島の青年組織の活動を事例に一 【座長】 溝田
11:15～ 11:40	天野裕介（愛媛大学） 離島留学における不登校経験児童生徒の心理的レジリエンス形成と地域文化の継承・再生 ―「魚島さざなみ留学」を事例として― 【座長】 大木	長嶋 俊介（鹿児島大学） 瀬戸内ミニ島嶼の持続可能性 【座長】 高木
11:40～ 12:05	小林歩夢（北海道大学） 江田島の慰霊祭をつなぐ 【座長】 天野	町泰樹（鹿児島高専） 与論島のシニグ祭祀の変容に関する一考察 【座長】 長嶋

9月6日(日) 午後

時間	第1会場（第2研修センター）	第2会場（大会議室）
13:00～ 13:25	第9回 島の医療を考える研究会 (13:00～16:30) 第1部 ご講演 テーマ：「豊島の急患搬送」 講師：石井 亨 氏（香川県土庄町議会議員） 第2部 報告・議論 テーマ：「血液備蓄所撤退による島々への影響と対策」	平田 和彦 （千葉県立中央博物館） ウミウは渡りの途中にカワウのいる島を経由する； 瀬戸内海におけるGPS追跡個体による一例 【座長】 城本
13:25～ 13:50		遠部 慎◎ （中央大学） 畑山智史 （中央大学） 四国沿岸部における弥生時代前期貝塚の自然科学的研究 【座長】 平田
13:50～ 14:15		城本高輝 （摂南大学） 小島嶼地域における関係人口形成の接続過程 ―コワーキングスペース利用者の地域との関係形成に着目して― 【座長】 遠部
14:15～ 14:25		休憩・移動
14:25～ 14:50		小川領一 （東海大学） 陸路遮断離島自治体における一般廃棄物処理体制の類型化 【座長】 堀本
14:50～ 15:15		鄭雨虹 （横浜国立大学） 鹿児島徳之島における離島留学制度と学校教育・地域社会との関係性 【座長】 小川
15:15～ 15:40		澤田成章◎ （東海大学） 日高優介 （鹿児島大学） 角祥平 （鹿児島大学） 奄美群島における高等学校等就学支援金制度の影響に関する研究 ―中学生の進路選択の変容と島別進学構造の実証分析― 【座長】 鄭
15:40～ 16:05		堀本雅章 （法政大学） 【座長】 澤田

「第9回 島の医療を考える研究会」のご案内

本研究会は、「島の医療体制づくり」という日本の島々の長年の命題に応えていくことを目的として、2018年暮れに有志によって立ち上げられました。島々の医療をめぐる現状と課題、そして具体的な対策について知見を積み上げるため、2019年1月から勉強会を重ねてきております。9回目となる今回は、「今治大会」に合わせて9月6日（日）13:00～16:30、今治地域地場産業振興センターで開催いたします（一般公開・ハイブリッド開催）。

プログラムの第一部はご講演であり、香川県土庄町議会議員の石井亨氏に「豊島の急患搬送」というテーマでお話いただきます。ご承知のように、豊島は「日本の縮図」「国内の先進モデル」とも称されており、長年にわたり住民が主体となって産廃問題に取り組み、無害化と土地管理が進められております。この豊島においても急患対応が生活課題としてあり、島を牽引してこられた石井氏に、詳しく実情を伺ってまいります。「福祉の島」として知られる同島ですが、いま人材不足から高齢者施設の存続問題にも直面しているとお聞きしており、総合的な観点から島の医療をめぐる問題とその具体的な解決策について議論できればと考えております。

第二部は、一昨年熊本での研究会で鹿児島県立大島病院麻酔科部長の大木浩氏（本学会員）により問題提起をいただいた血液備蓄所撤退をめぐる問題であり、改めて島々への社会的な影響について検証いたします。現在、有志の方々と試みている実態調査とその結果をご報告するとともに、懸念される緊急時の輸血リスクの問題について対応策を話し合ってまいります。

昨年の海外事例、スコットランド・シェットランド諸島との比較につづいて、ぜひ今回も身近な地域医療の存続の観点から、皆さまと共に活発に議論できればと考えております。ハイブリッド開催を予定しておりますので、オンラインでご参加されます方は、研究会ポスターのフォーム/QRコードよりお申し込み下さいますと幸いです。研究会に関するお問い合わせは、研究会担当の青木理事、前泊理事、もしくは前畑までお声掛けくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

（文責 前畑 E-mail : akemi.maehata.sg@hosei.ac.jp）

「第9回 島の医療を考える研究会」

ハイブリッド開催のご案内

この研究会は「島の医療体制づくり」という日本の島々の長年の命題に応えるため、島の医療に関する知見を集めることを目的として2019年1月に活動を始めました。今年度は愛媛県今治市の今治地域地場産業振興センターで開催し、瀬戸内海に浮かぶ島、香川県豊島の救急搬送の実情についてご講演いただきます。また、近年問題化している血液備蓄所撤退による島々への影響と対策について活発に議論してまいります。一般公開の研究会ですので、どうぞお誘い合わせの上、ご参加ください。

豊島・唐櫃港

日時：2026年 9月6日（日）13：00～16：30

会場：今治地域地場産業振興センター
愛媛県今治市旭町二丁目3番地5



写真：豊島の民間救急艇「おりぶ7」
石井氏ご提供

参加申込：会員・非会員ともに参加費は無料です。会場にお越しください。

オンライン（Zoom）参加されます方はフォーム/QRコードよりお申し込みください。



プログラム

<司会>島の医療を考える研究会

<https://forms.gle/Zjura4Nz5MkAsaNdA>



第1部 ご講演

講師：香川県土庄町議会議員

石井 亨 氏

テーマ：「豊島の急患搬送」

※質疑応答あり

第2部 報告・議論

◆ 血液備蓄所撤退による島々への影響と対策

主催：日本島嶼学会 島の医療を考える研究部会

共催：日本島嶼学会 次世代研究ネットワーク支部

後援：島嶼コミュニティ学会、島嶼産業研究会

日本島嶼学会 2026 年度第 1 回理事会 議事録

【2026 年 5 月 17 日（日）13:00～14:45（オンライン開催）】

1. 開会宣言 13時00分

小西会長より開会宣言が行われた。本理事会は、現地会場とテレビ会議システムを併用し、ハイブリッド形式で行われた。当該テレビ会議システムは、出席者の音声と映像が即時に他の出席者に伝わり、出席者が一堂に会するのと同等に適時的確な意見表明が互いにできる状態となっていること、また、これにより本理事会は、出席者が一堂に会するものと同等の相互に充分な議論を行うことができる会議であることが確認された。

2. 理事出欠確認（50音順）

【テレビ会議出席】小西会長、村上副会長、青木・長谷川・波多野・野呂・藤田・前畑・真崎・町・松村の各理事、澤田委員、可知参与

【欠席】鳥居副会長、大塚常務理事、大西常務理事、前泊・溝田・山本の各理事（3件委任状提出済）

【書記】松村

3. 前回議事要旨確認

2025 年度第 5 回理事会議事録（NL81 号に掲載済み）が確認された。

報告事項

1) 会員動向

・長谷川理事より、新入会員 5 名、1 名の入会保留、退会届の提出 2 名が報告された。小西会長より、会員動向のニュースレターでの公開範囲について質問がなされ、長谷川理事より、会員動向の公開については、81 号ニュースレターに準じて行くと回答された。

2) 『島嶼研究』編集・発行状況

・町理事・島嶼研究編集委員より、『島嶼研究』編集・発行状況として、島嶼研究 27 巻 1 号として、論説 1 編および書評 1 編を掲載し 2026 年 3 月 31 日に発行したこと、島嶼研究 27 巻 2 号（2026 年 9 月 30 日に発行予定）として、論説 3 編を査読中、研究ノート 1 編を査読中、書評 1 編執筆依頼済であることが報告された。

3) 島嶼学会賞の応募状況について

・藤田理事より栄誉賞部門に推薦があったこと、奨励賞部門は応募がなかったことが報告された。

4) 研究助成の応募状況について

・波多野理事より 1 件の応募があったことが報告された。

5) ニュースレターの編集・発行状況について

・澤田委員より、ニュースレターの発行状況として、81号は2026年3月発行済みであること、82号を2026年7月20日に発行予定であることが報告された。

6) 2027年度大会開催地について

・小西会長より、鳥居副会長と検討を進めていることが報告され、これまでの開催地等バランスを考慮した候補地を引き続き検討することが確認された。

7) 法政大学沖縄文化研究所 紀要『沖縄文化研究』第53号における中俣均元会長の追悼特集号発刊について

・前畑理事より、法政大学沖縄文化研究所 紀要『沖縄文化研究』第53号における中俣均名誉会長の追悼特集号発刊についての情報共有がなされた。

8) 島の医療を考える会の準備状況

・前畑理事より、島の医療を考える会の準備状況として、第9回島の医療を考える会について、次回学会開催期間中の9月6日（日）13:00～17:00にて、内容構成、講演者への依頼を進めていると報告された。

4. 協議・審議事項

1) 今治大会2026「実施要領」「申込書様式」など

・西村実行委員の代理として、澤田委員より報告がなされた。

・一部、資料の表現や誤字が修正された案が承認された。引き続き、実行委員会での微細な修正・確認を進め、Web ページでの公開を5月下旬～6月上旬に予定していると報告された。

・野呂理事より、大会の実施要領の承認に伴う大会助成金の支出が説明された。大会助成金として、一律15万円支出することになっていることから、学会大会実行委員会通帳に15万円を大会助成金として支出することが確認され、承認された。

・澤田委員より、紙媒体の要旨集配布について、現段階では、学会員には基本的にはPDFでの共有を想定していることが確認された。

2) 次回理事会候補日

・小西会長より、オンライン形式にて6月中旬～7月上旬（7月5日東京にて対面も候補日）にて、次回臨時理事会の日程調整が近日中に行われることとなった。

※理事会終了後、臨時理事会として、7月2日（木）18:00～オンラインにて開催されることとなった。

5. 閉会宣言 14時45分

・現地会場とテレビ会議システムを用いたハイブリッド形式での理事会は、終始滞りなく議事が終了した。



伊東潤 著

『男たちの船出-千石船佐渡海峡突破』

(光文社文庫、2021 年、860 円(税別))

本書を紹介したい動機は、塩飽牛島と佐渡が 2 中心舞台であり、塩飽大工の造船技術+佐渡宿根木での日本初千石船建造と、本格的荒海荒波での試走挑戦、川村瑞賢も登場する展開にある。船の構造と建造技術の仔細+佐渡冬季「地獄の釜」渡海+河村瑞賢の差配/構想/能力/人となりの記載がそれぞれ具体的・魅惑的であり学びへの関心を誘う。論文では表せない小説という手段ならではの迫真の知見ベースとして「史料や民俗学的知見」の読み易い紹介と暴露は味読の対象となる。想像・創作・脚色がつきものであるが、学術のニッチを啓蒙的に切り開き真実味にどれだけ近づけたのか。その真実味の境界を書き込むのも作者の力量であり、境界の見抜きは読み手側の力量でもある。通常断定されていない史実の尾緒の多くはこのような小説の力を受けその境界に右旋左旋の影響を受け易いが、その逞しい想像力が史実検証・現場訪問意欲を掻き立てる。

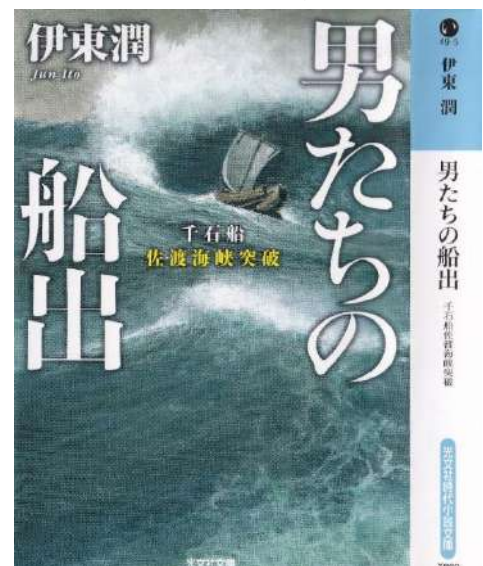
鎖国もあり外洋航海用大型船禁止で 500 石船までの時代。主人公の父は牛島で自信を持って 700 石積みの大船を造るが時化で沈没、父が右腕と頼む塩飽船大工である父の弟や大勢の船子を失う。河村瑞賢(作では通称)からの千石船建造(早魃/凶作出稼ぎ等で急増した江戸人口対策+米不足で東北天領から調達需要の趨勢的激増への対応)依頼を父は失意の中断る。息子:主人公はそんな父を詰り、父は子を義絶する。子は一人千石船建造に取り組むことを決意し、大阪:淡路屋で修行。河村瑞賢が「日本一海が荒れている」とする場所での建造を進める。宿根木では主人公が責任を取れない 750 石船の建造も試走で失敗。生前の叔父と設計した千石船仕様への改良提案が認められ試走に自ら乗り込むが主人公が最後の一人となり全員を救い亡くなる。河村瑞賢から聞いた父は自ら佐渡に向かい次の千石船に挑戦しリベンジに成功する。

塩飽の船大工集団(広島・本島・櫃石島・牛島)・岩礁の多い地瀬戸内 500 石船迄の瀬戸内仕様の具体確認に興味を注られる。大三島や倉橋島も有名な和船建造地であった。作品の現地、塩飽牛島の南部小浦港・池神社、表玄関里浦港近くの丸尾屋敷跡・極楽寺・聖神社、塩飽本島の福良、佐渡宿根木の千石船建造地の特定・塩飽大工参画の有無、そして「地獄の釜」史実・千石船(再現物である白山丸)構造/試走の確認、川村瑞賢・北前船史実仔細の再々確認への刺激も戴いた。

幸い佐渡の江戸期海難史は相川測候所『佐渡災異誌』1961 年に概ね拾い出されている。漁船もあるが廻船では、1649-9(以下新暦年-月)小木掛廻船 400 艘難波, 1723-11 羽田/小木:械船 121 破損, 1739-1 小木湊出港後御用船破損 5 死, 1739 -11 小木年貢船 8~9 艘, 1740-8 宿根木船能登で

破損 5 死, 1765-8 小木南風 100 艘難 4 死, 1774-10 越前船沢根座礁 2 死, 1825 -11 近国廻船数艘
沖合難船溺死有, 1828-11 越後国 2 人乗り廻船 7 艘破船 2 死+宿根木船 2 死, 1829-4 亀脇→沢崎:
加州船 6 中 1 死, 1830-4 椿尾:大阪船 19 人乗酒田城米空で破船, 1830-7 田切須:越中船空船 2 艘
破船, 1832-4 原黒船主婦帆溺死(新潟船漂流 2 救助), 1832-10 小木:越中伏木船積荷紅花汐濡/檣
(ほばしら)捨 4 日目入津, 1836-8 野浦:蒲原郡船 1 死/水津:能登羽咋船外 8 艘/夷湊:柏崎米積空船
等 12 艘難破, 1836-10 八幡新町浜:能登珠洲船難破種油 2 斗入 48 樽/麩粕 3 斗入 22 俵/半紙 6 匁
被害, 1839-8 山口須佐沖:佐渡廻船沢根銅 1720 貫目/翌月湊米 760 石/翌々月破船全水没 1 死 3
怪我, 1842-5 北河内船行方不明 5…等である。因みに造船地寒風沢島を抱える塩竈市ホームペー
ジ千石船の項に「難破船の多い年は、仙台から下関までの間で 1800 隻にものぼった。1842(天保
13)年には 9 ヶ月間に実に 500 余隻の船舶が難破している」とある。難破船が多いのは事実であ
るが佐渡災異史頻度が特異であるわけでもない。記載の多くが北と西の沿岸である。

著者は特設ホームページで本州沿岸の三大難所を津軽海峡・熊野灘～遠州灘・佐渡(国土地理院
用語で地元では越佐) 海峡とし、遭難数は江戸一大坂間需要もあり熊野灘～遠州灘が断トツ、海
の荒れ方のひどさは佐渡海峡が一番とする。問題は「地獄の釜」の存在である。著者は「①潮流
(=青潮)は西から東、②佐渡島という巨大な岩塊、③佐渡近海の海底の隆起は激しく、潮流は極め
て複雑な動きをする。④江戸時代初期佐渡海峡を通れるのは一年のうち四～六カ月程で残る半年
程交通は途絶する」とし作品の中では小木→新潟は安全、その逆が危険としている。地元越佐航
路は新潟→小木を選ばず(一時新潟⇄小木の高速船航路はあったが冬季休業)、古代は松ヶ崎⇄寺
泊(角田浜が最短距離 31.5km), 江戸期奉行は出雲崎⇄赤泊 43.5km、金荷道は小木⇄出雲崎 47km
の安定航路を選んでいる。現在の小木⇄直江津航路はフェリー限定で冬季休業(11 月第 3 火曜日
-3 月第 3 金曜日)。冬季新潟→小木は、元々海を熟知する地元航路選択肢ではない(さ程に厳しい
冬季海路ともいえる)。問題は「地獄の釜」発生個所である。1000m 級大佐渡山脈の影は明治維新新潟+佐渡夷(現両津)
開港の理由づけにすらなっている。越佐海峡に岩礁地帯は限定的で、600m 級小佐渡南部も海洋深層水を汲み上げる
程の急傾斜深海域である。縄文海退で出現した小木南部島
状地(舌状で津波誘因地形、より越後側で佐渡からは少し距
離がある)以外考えられない。当時の船乗りの共通認識にな
っていなかったとしたら確かに high-risk である。小説本
来の人間模様も読み応えがあった。(長嶋俊介)



『人間が「人間」となるためのコミュニティ 環境・共生・協働』

(いのちのことば社、2026年3月、2200円(税別))

帯には「人間らしく共に生きる地域のコミュニティをどのように形成していったらよいのか。それに伴う具体的な課題は何か。それぞれの地域で取り組んできた事例を紹介し、環境に配慮した共生・協働の社会に求められるものを考える」とある。本書を取り上げた理由は、パパラ(ン:現地発音)ギと、ハワイ大学出身の佐渡自然共生科学センター(里山)教官の2章+人間力を高めるとされるコミュニティ≡小規模離島の「共育」力の源泉を学びたいためであった。忌避したい教会淵源の諸疑問にも真正面から反省し取り組んでいることにも覚醒感があった。

前者ではサモアの歴史記述が物足りなかったが、現地を踏み人間の金銭欲/システムへの対抗と農が果たす可能性に深く関わり共感を得た。後者は多重環境認識と朱鷺野生復帰に真摯に取り組む農業者と地域のゆるやかな対話+小さな試行の積上げとその参与観察実践が参考になった。

本書は章形式をとっていない。目次は①神に愛されたいのちに向かって共に生きる教会へ(以下表題著者順) ②パパラギに立ち返る③農業者たる前に人間たれ④感情と環境とあなたとわたし⑤「持続可能な世界」で何を持続させるのか⑥かけがえのないいのちに向かって⑦食文化とコミュニティ、地域についての考察⑧重なり合う環世界で共に生きる⑨総合病院から考える共生⑩座談会1 包摂・協働とコミュニティ(小田部/勝野/中井) ⑪座談会2 福祉・尊厳とコミュニティ(池迫/空閑/佐々木) ⑫座談会3 環境・共生とコミュニティ(泉川/島村/豊田) 全員が各現場体験をコアにして地域共生の実践について深く考えている。

2013年世界教会協議会『いのちに向かって共に』をベースに「人間らしく共に生きていける」コミュニティ形成のための協働」を教会として考えるための研究会の成果物である。植民地主義的宣教からの訣別で世界に対する宣教主体を教会から神にパラダイム転換(神⇒世界⇒教会:以前の神⇒教会⇒世界=植民地主義傲慢を懺悔し謙虚に学び協働する姿勢に転換)することで、教会は世界(地域)からのアジェンダを目指す。中央(特権)からではなく周縁(正義と尊厳被排除側)からの宣教で、人間中心主義を懺悔し、共同体としての教会が環境・経済に対する正義に向かい、人類と被造物の相互承認と共生を実現する。人間の全体性の回復=癒しを図り、文化的・人種的・宗教的伝統・他者との境界線を越え、奉仕することで「いのち(被造世界全体の開放と和解)に向かって共に」をコミュニティで実践する課題趣旨が①で示される[一神教的絶対者制約はアニミズム的多神教認識とは異なり解消されないが、そこも和解=相互理解の対象/また現在におけるコミュニティとゆるい共同体であることが必須で、教会のそれとは異なる]。

人間たれは、③有機農業でプライドを持つ高校教育。④臨床宗教師(chaplain/東北大学で養成講座):禅寺で分福(感情の分かち合い=平和の実現)をテーマに、感情の見える化等に取り組み繋がり、無条件に「自分らしく生きられる場」、傾聴の力と正しさの暴力、寺小屋の効能等を説く。⑤持続可能性をヒト-ヒト,ヒト-自然関係

の犠牲にする不正を前提にしない生き方・共同の仮説づくり(他者の意見に耳を傾け vulnerability:傷つきやすさを引き受け、生身をさらし愛/帰属/喜び/勇気/共感/創造性の経験の側に立つ)とする。⑥無縁社会から支縁という繋がりは、周縁側に立ち compassion:ともに苦しみ歩むことで人の尊厳守護の場にする。⑦Slow-food運動の人権的原点を説き、黎明期 a 小生産者守護 b 消費者の味教育 c 伝統的稀少な農産物と味を守るの3柱に拘る。棚田・生産・食・歴史見直を通じて地域・コミュニティ・アイデンティティ再生や地元学的取り組みに繋がった事例も国内外に多い。⑨総合病院内 chaplain が誰もが尊重されるべき医療の Trans-gender 患者が抱える個の立場に立てないシステム卓越の院内諸困難=生きづらさ/被自責に「一緒に苦しむ」共生の課題を考える。⑩は①④⑨論者: 2chaplain と神学教官の座談会で、心配し合い分かち合い感情を表出できる、人としての丸ごとの営みが見える、世代が輪切りではない、生きづらさや弱み等不完全な自分に向かい合ってくれる=公正・包摂的で共に生きる場=とまり木としてのコミュニティが論じられる。⑪は②⑤⑥論者:ゴミ・食・精神の悩み/生き物サイクルの一部として人間+暮らしに落とし込む/教区内全体の異質と痛みを自分事とする compassion で人間らしさ=受援力共生の場再考。⑫は③⑦⑧論者:世界の全てに神を見出す/川上集落に目を注ぐ・岩見銀山古民家街並みに相応しい幼稚園留学+2 企業立地/be-ing に立ち戻る+community empowerment が気になる key-words であった。総じて3年計10回の活動成果は教会枠組みを超えて訴求力のあるコミュニティ論であった。

本書は島嶼学テーマに更えられるべき知見が随所にあるが、元より⇔vulnerability は島嶼小国の経済 index としてマルタ大学で取り上げられ続けてきたテーマである(community-level で怯まず立ち向かう方法が示されている)。また小さな島のコミュニティ(+Glocal)危機と交流人口受入れ力形成のヒントとしての島留学・slow-food・環世界/持続可能性・「アイランドセラピー」認識再考に諸手掛がある。それらに想いして読み込み戴けたら幸甚である。

(長嶋俊介)



『都の風—阿新丸物語』

(中央印刷、2015 年、1,852 円 (税別))

阿新丸を「くまわかまる」と読める人は、島嶼=佐渡に深く関わるか南北朝・建武の中興史や「太平記」を詳しく知る余程の歴史通である。阿新ではなくその父日野資朝は良く知られた存在である。佐渡では妙宣寺に墓があり、資朝を祀る大膳神社能舞台は佐渡 35 能舞台の現存現役最古のものである。大膳神社神主は高校国語の教諭、著者は中学高校同窓 1 年下である。

磯田道史『司馬遼太郎 100 分で名著』NHK 出版 2016 年では歴史文学を史伝文学・歴史小説・時代小説に分類するが、本書は史伝文学的であり、仔細を時間かけ整理して小説に仕立てているので流石に島内逃走経路等の経緯行動が分かり易く面白い。時代背景は周知が前提なので、『太平記』研究家の兵藤裕巳『後醍醐天皇』岩波新書 2018 年を参考にして、確認することで日本の歴史全体と連動して読み込めてくる。因みに後醍醐天皇も島:隠岐(道後西郷説と、別説扱:島前西ノ島別府港真北には木御所史跡がある)に流されている。そこを抜け出して南北朝の歴史が始動する。

日野資朝は鎌倉時代後期公卿で(権大納言日野俊光の次男。後醍醐天皇や日野俊基らと宋学に傾注し、ひそかに討幕をめざした正中の変(当今御謀反 1324 年)の罪を一身にかぶり、佐渡へと流罪になる。13 歳の阿新は従者 1 人をつれて佐渡に渡り、守護本間入道に父子の対面を願った、間近に生存する父と会うことが叶わぬままに父は処刑された。折悪しく父は後醍醐天皇による次の元弘の変(1331-1333 年)で、日野俊基と共に処刑の対象とされたのである。復讐の機をねらう阿新は、ある夜本間の寝所に忍び込んだが、入道は不在で果たせず、父を斬った本間三郎を殺して巧みに逃げ、山伏に助けられて都に帰った話は『太平記』にも詳しく記されている。その後阿新は邦光と名のり南朝の忠臣となり、中納言に任ぜられ、明治時代になりよく忠孝を実践した人物として顕彰され、1915 年には正三位を追贈されている。後醍醐天皇が特別な位置づけになるのは、明治維新前=水戸学派の尊王攘夷(あるいは頼山陽の『日本外史』古来天皇治国説)と維新の公武合体、南北朝正閏論での明治天皇南朝正統裁断が大きく与っている。

資朝は『徒然草』152-154 段に 3 度も取り上げられるほど非業の死と学問に秀でた切れ者として関心を寄せ(兵藤 pp.54-55)、同じく佐渡に流された京極為兼を羨む 26 歳の資朝に関する 153 段も興味深い。5 年後 1303 年に赦免される京極(日蓮も 1274 年赦免)は、前の順徳(承久 3(1221)年—仁治 3(1242)年)、後の資朝・世阿弥(永享 6(1434)年 5 月-嘉吉 3(1443)年 8 月没:推定)の悲哀とも対比される。また後醍醐天皇・資朝が密議の場とした「無礼講」的空間は、芸能的寄合を諸芸諸道に秀でた「同朋衆」を育て、申楽⇒能楽、茶道、華道(立花)、香道等の草創期であり、日本的文化の始発・古典日本語から近世近代日本語への移行期でもある(兵藤 pp.2-3, pp.194-200)としたら、順徳[武家政治の日本史+皇室ルールの確立]とも対比される資朝/後醍醐[日本の文化確立]の日本史画期と島嶼部隠岐+佐渡の中央/周辺の構図は興味深い。

またミニ島嶼史においても資朝は興味深い。出雲崎橘屋の名は正中二(1325)年 7 月風待ち宿で資朝が出立に際し庭の橘を見て「忘るなよ 程は波路を へだつとも 替わらず匂へ 宿のたちばな」と詠んだ短冊に因むとされ、後に廻船問屋橘屋は名主となり、分家佐渡相川大間港橘屋に良寛の母が生まれ出雲崎本家の養子となり、出雲崎で良寛が生まれる。

なお 13 歳阿新丸像は真野地区「佐渡歴史伝説館」入口の池で竹のしなりを利用して逃げ出す人形姿として来館者の歓迎役をしている。



[目次]はじめに、序章、淵源、鳴動、一網打尽、覚醒、旅立ち、受難、回復、渡海、消息、対面、相克、すれ違い、あらぬ会面、復讐、決行、遁走、奮起、夢と希望と、あとがき、参考文献 扉・表紙写真約 45 点や本文中写真は著者本人が足で稼いだもので丁寧な現場主義の精神が伺える。

(長嶋俊介)



会員の動向（2026 年 3 月～ 7 月）

1) 入会 7 名（うち 1 名再入会）

2) 変更 2 名（所属先の変更）

3) 退会 4 名

会員総数 195

『ニュースレター』の原稿を募集しています

日本島嶼学会では『ニュースレター（電子版）』を年に 3 回（7 月、12 月、3 月）発行し、総会・理事会・研究大会に関する報告のほか、島嶼に関する諸情報や会員の動向、書評などを掲載しています。会員の皆さまから広く原稿を募集していますので、第 82 号（2026 年 7 月 20 日頃に発行予定）への掲載を希望される方は、2026 年 7 月 10 日までに原稿をお寄せください（送付先：mizota64@gmail.com または s.sawada@tokai.ac.jp）。会員の皆様からの情報のご提供をお待ちしています。

日本島嶼学会ニュースレター 第 82 号

発行日 2026 年 7 月 31 日（次号は 2026 年 12 月発行予定）

編集者 澤田 成章・溝田 浩二

発行者 日本島嶼学会（事務局）

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

鹿児島大学 国際島嶼教育研究センター

大塚研究室

E-mail : yotsuka@cpi.kagoshima-u.ac.jp

学会ホームページ <http://islandstudies.jp/>

年会費 正 会 員 10,000 円

準 会 員 5,000 円

学生会員 3,000 円

賛助会員 1 口 10,000 円（5 口以上）

郵便振替口座 01790-3-113215

（加入者名：日本島嶼学会）
